

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）

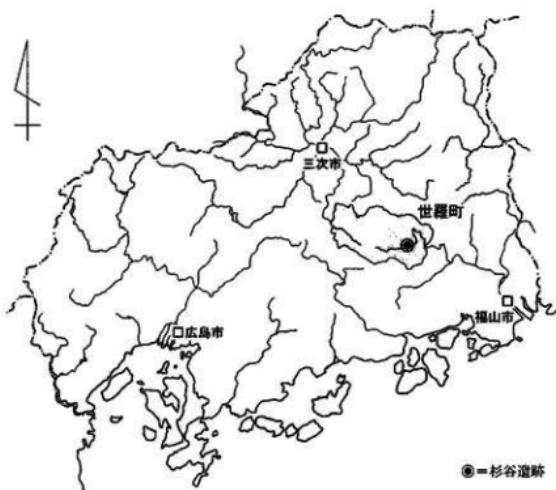
杉谷遺跡

2014

公益財団法人 広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）

杉谷遺跡



2014

例　言

- 1 本書は、平成 21（2009）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う
杉谷遺跡（世羅郡世羅町東上原所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との
委託契約により、財団法人広島県教育事業団（平成 25 年 4 月 1 日付けで公益財団法人広島県教
育事業団に名称変更）が実施した。
- 3 発掘調査は、主任調査研究員の青山 透（退職）と調査研究員の辻 满久（現・主任調査研究
員）・山澤直樹が担当した。
- 4 出土遺物と図面の整理は青山を中心に、山澤と資金職員の木村和美・村田智子が行ない、写
真撮影は主任調査研究員の梅本健治が協力した。
- 5 本書は、山澤が執筆・編集した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は、P が柱穴、SK が土坑である。
- 7 土器の断面は、須恵器及び須恵質土器は黒塗り、その他の土器は白抜きである。
- 8 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北を使用した。
- 9 第 2 図は国土交通省国土地理院発行の 1 : 25,000 地形図「甲山」及び「本郷」を使用した。
- 10 出土品及び記録類は、全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目 8-49）
において保管している。

本文目次

I	はじめ	1
II	位置と環境	6
III	調査の概要	10
IV	調査の成果	12
V	まとめ	20

挿図目次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図	4
第2図	周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)	7
第3図	周辺地形図 (1 : 2,000)	10
第4図	遺構配置図 (1 : 250)	11
第5図	杉谷遺跡断面想定図 (1 : 150)	12
第6図	柱穴群実測図 (1 : 80)	13
第7図	P 4 及びSK 1 実測図 (1 : 30)	14
第8図	出土遺物実測図 1 (1 : 3, 2 : 3)	17
第9図	出土遺物実測図 2 (1 : 3, 1 : 2)	18
第10図	土師質土器皿類・杯類の寸法分布	21

表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧	2
第2表	出土遺物観察表 (土器)	19
第3表	出土遺物観察表 (石製品)	19
第4表	広島県内の白玉を出土した古墳及び遺跡	20

図版目次

図版 1	a 遺跡遠景 (南東から) b 遺跡近景 (北西上空から) c 遺跡全景 (南東から)	図版 3	a SK 1 遺物出土状況 (東から) b 同上 (西から) c 同上 (南から)
図版 2	a 柱穴群発掘状況 (北から) b P 4 遺物出土状況 (南西から) c P 4 土層断面 (西から)	図版 4	出土遺物 1
		図版 5	出土遺物 2

I はじめに

杉谷遺跡の発掘調査は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続する中国横断自動車道尾道松江線の建設事業に係るものである。事業は、瀬戸内海地域と日本海地域間における輸送時間の短縮と一般道の交通混雑の緩和を図り、産業・経済・文化を発展させると共に、沿線地域の生活を向上させることを目的としている。

工事着手に先立ち、日本道路公团中国支社尾道工事事務所（以下「道路公团」という）は、平成 13（2001）年 2 月 7 日、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という）と協議した。これを受けて県教委は現地踏査を行い、平成 14（2002）年 3 月 27 日に事業地内に試掘調査が必要な箇所がある旨を回答した。

その後、道路公团は解散し、事業は平成 17（2005）年 10 月 1 日に西日本高速道路株式会社に引き継がれ、平成 18 年度からは国土交通省中国整備局福山河川国道事務所（以下「国交省」という）に承継された。

県教委は、平成 20（2008）年 8 月 8 日付けで、当該箇所の試掘調査において杉谷遺跡（900 m²）を確認した旨を国交省に回答した。遺跡の取扱いについて県教委と国交省は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。国交省は、平成 21（2009）年 2 月 16 日付けで世羅町教育委員会（以下「世羅町教委」という）宛てに文化財保護法（以下「法」という）第 94 条第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、世羅町教委は同年 2 月 23 日付けで国交省宛てに工事に先立って対象面積のうち 870 m²は発掘調査、30 m²は工事立会が必要である旨を通知した。これを受け、国交省は同年 2 月 27 日付けで財團法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という）に杉谷遺跡の調査依頼を行ない、同年 4 月 1 日付けで委託契約を締結した。教育事業団は同年 8 月 3 日付けで法第 92 条第 1 項の規定に基づく「発掘調査届」を世羅町教委宛てに提出し、世羅町教委から同年 8 月 7 日付けで法の趣旨を尊重して慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。発掘調査は同年 9 月 7 日から 10 月 16 日まで行なった。

本書は、以上のような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり、広く埋蔵文化財の資料として、また地域の歴史を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所、世羅町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(1)

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次 鉄状堅泥群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字 二の丸	中世	城跡			
		第2次 1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日						
		第3次 西堅泥	平成15年11月16日～ 11月28日						
曾川2号遺跡		平成15年1月20日～ 3月2日		尾道市御調町大町字 西川	古代末～中世	集落跡			
(2)	曾川1号遺跡	A地区 旧・平成14年度 調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字 曾川	弥生時代～中世	集落跡			
		B地区 旧・P2第一調 査区	平成15年4月7日～ 5月23日						
		C地区 旧・P2第二調 査区	平成16年1月6日～ 2月5日						
		D地区 旧・P1	平成16年8月5日						
(3)	池ノ奥古墳	平成16年8月23日～ 10月28日		世羅郡世羅町宇津戸 字天神	古墳時代後期	古墳			
城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日		尾道市御調町大町字 城根	古墳時代か	箱式石棺			
(4)	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字 二の丸	中世	城跡			
	曾川1号遺跡	E地区 旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字 米田	绳文時代後期～ 中世	包含地			
(5)	曾川1号遺跡	G地区 旧・P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字 曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
		H地区 旧・P3側道							
		I地区 旧・P4側道	平成17年1月11日～ 3月4日						
		J地区 旧・P2							
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字 曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
(7)	札場古墳	平成17年11月21日～ 平成18年1月27日		三次市後山町 字札場	古墳時代後期	古墳			
	大平遺跡	平成19年6月25日～ 10月5日		三次市後山町 字大平	弥生時代後期～ 古代	集落跡			
	後山大平古墳	平成19年6月25日～ 10月5日		三次市後山町 字大平	古墳時代後期	古墳			
(8)	北野山遺跡	平成18年7月3日～ 8月4日		三次市吉舎町敷地字 北野山	平安時代	仏教開闢の 施設跡			
(9)	向江田中山遺跡	平成18年4月17日～ 6月23日		三次市向江田町 字中山	古墳時代末～ 古代	集落跡			
(10)	椎原第1～3号古墳	平成17年7月11日～ 11月11日		三次市向江田町 字椎原	古墳時代中期	古墳			
(11)	大畠奥池第1～3・7号古墳	平成18年4月17日～ 8月4日		三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代後期	古墳			
(12)	茶臼古墳	平成20年7月7日～ 9月5日		三次市甲奴町字賀 字茶臼	古墳時代中期	古墳			
(13)	瀬戸越南古墳	平成19年6月25日～ 8月10日		三次市向江田町 字瀬戸越	古墳時代中期	古墳			
(14)	上陣遺跡	平成19年7月9日～ 8月31日		三次市向江田町 字上陣	古墳時代中期	集落跡			
(15)	和知白島遺跡(第2次)	平成19年9月25日～ 12月21日		三次市和知町 字白島	後期旧石器時代	集落跡			
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～ 9月21日	庄原市口和町金田 字本谷	古墳時代中期	古墳			
	平成19年12月3日～ 12月7日								
(17)	家ノ城跡	第1次 南東郭群	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木ノ庄町木槻 字家城東平	中世	城跡			
		第2次 南東郭群	平成16年5月17日～ 6月11日						
		第3次 1郭周辺	平成17年10月17日～ 11月11日						
		第4次 1郭・北尾根	平成18年4月17日～ 7月21日						
		第5次 1郭・北西尾根	平成19年4月16日～ 6月15日						
(18)	片野中山第9～12号古墳	平成19年4月16日～ 8月8日		三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代中期	古墳			
(19)	右谷遺跡	平成19年4月16日～ 8月8日		三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代後期～ 古代	集落跡			
(20)	和知白島遺跡(第1次)	平成18年4月17日～ 12月22日		三次市和知町字白 島・四拾吉町字三重	古墳時代中期～ 古代	集落跡・古墳			
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日～ 12月15日	三次市四拾吉町 字段	古墳時代中期～ 後期	集落跡			
		第2次	平成19年9月25日～ 12月21日						

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(2)

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(21)	川平第1号古墳			庄原市口和町常定 字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡		平成20年4月21日～ 6月20日		古墳時代後期	集落跡
	常定川平2号遺跡				縄文時代	竪穴
(22)	船干場第2～4・9号古墳		平成19年10月9日～ 12月21日	庄原市口和町大月 字船干場	古墳時代後期	古墳
(23)	只野原1号遺跡		平成20年9月8日～ 9月26日	庄原市高野町 下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
	只野原2号遺跡		平成22年4月19日～ 11月19日		—	自然流路
	只野原3号遺跡	第1次	平成21年5月18日～ 8月28日	庄原市高野町 下門田字登立	旧石器時代～ 古墳時代	包含地 集落跡
(24)	番久遺跡		平成20年7月28日～ 12月25日	庄原市口和町大月 字番久	縄文時代～ 古墳時代	集落跡 竪穴
	原畠遺跡			庄原市口和町大月 字原畠	弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平1号遺跡		平成20年4月21日～	庄原市口和町向泉 字川平	旧石器時代～ 縄文時代	包含地
	向泉川平2号遺跡		7月11日		弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(26)	石谷2号遺跡	第1次	平成21年4月13日～ 6月12日	庄原市口和町金田 字塩谷	縄文時代	竪穴
		第2次	平成22年4月12日～ 6月23日			
	石谷3号遺跡		平成21年4月13日～ 6月12日	庄原市口和町金田 字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡			庄原市水越町 字馬ヶ段	古墳時代後期～ 奈良時代前期	集落跡 横穴墓
	馬ヶ段第1号横穴墓		平成20年4月21日～ 7月11日			
	馬ヶ段第2号横穴墓			庄原市水越町 字島坂	古墳時代後期	炭窯跡
(28)	三重1号遺跡	第1次	平成20年11月4日～ 12月19日	三次市四拾賀町 字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第2次	平成21年4月13日～ 9月25日		古墳時代中期	集落跡
	宮の本第20～26・31・32号古墳		平成19年4月16日～ 12月21日	三次市向江田町 字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古墳
(29)	岡東第1～7号古墳		平成20年5月7日～ 9月26日	庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代中期	古墳
	岡1号遺跡		平成20年5月7日～ 9月26日	庄原市高野町岡大内 字岡	時代不詳	竪穴
	岡2号遺跡		平成21年4月13日～ 5月15日	庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代後期	集落跡
(30)	半戸1号遺跡		平成22年4月12日～ 5月14日	庄原市高野町岡大内 字半戸	縄文時代～	竪穴
	岡東第1号横穴墓		平成24年9月3日～ 9月21日	庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代後期	横穴墓
	風呂谷遺跡		平成21年4月13日～ 11月20日	三次市四拾賀町	後期旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代後期 古代	包含地 集落跡
(31)	風呂谷古墳		平成21年4月13日～ 11月20日	三次市四拾賀町	古墳時代後期	古墳
	宮の本遺跡		平成20年4月21日～ 10月31日	三次市向江田町 字宮本	古代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳		平成20年4月21日～ 10月31日	三次市向江田町 字宮本	古墳時代後期～ 古代	古墳
(32)	箱山第3～6号古墳		平成18年8月21日～ 12月8日	三次市向江田町箱山	古墳時代前期～ 後期	古墳
	下矢井南第3～5号古墳		平成19年10月9日～ 12月21日	三次市吉舎町矢井字 西見山・敷地字北野山	古墳時代前期～ 中世	古墳
	若見追遺跡		平成19年4月16日～ 5月25日	三次市三良坂町岡田 字若見追	古代	集落跡
(33)	烟尻遺跡		平成21年4月13日～ 6月5日	三次市三良坂町岡田 字烟尻	旧石器時代 縄文時代 近世	集落跡
	三隅山遺跡		平成24年4月9日～ 8月10日	三次市三良坂町長田 字三隅山・堂前	中世～近世	墳墓
(34)	根藤城跡		平成20年4月21日～ 7月31日	三次市安政町小笠 字根藤・小豆山	中世	城跡
	杉谷遺跡		平成21年9月7日～ 10月16日	世羅郡世羅町東上原 字杉谷	古墳時代 中世～近世	集落跡



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 (1)～(38)は報告書番号

第1表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)』 2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (2) 曾川1号遺跡 (A～D地区)』 2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (3) 池ノ奥古墳』 2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (4) 城根遺跡 曾川1号遺跡 (E地区) 牛の皮城跡 (第4次)』 2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (5) 曾川1号遺跡 (G～J地区)』 2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (6) 曾川1号遺跡 (K地区)』 2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (8) 北野山遺跡』 2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (9) 向江田中山遺跡』 2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (10) 権現第1～3号古墳』 2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (11) 大畠奥池第1～3・7号古墳』 2010年

- (12) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（12）茶臼古墳』 2011年
- (13) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』 2011年
- (14) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（14）上原遺跡』 2011年
- (15) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡（旧石器時代の調査）』 2011年
- (16) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第2～5号古墳』 2011年
- (17) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡（第1～5次）』 2012年
- (18) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
- (19) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡2（古墳時代の調査）』 2012年
- (20) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡（第1・2次）』 2012年
- (21) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡』 2012年
- (22) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稻千場第2～4・9号古墳』 2012年
- (23) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』 2013年
- (24) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畠遺跡』 2013年
- (25) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡』 2013年
- (26) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷2号遺跡・石谷3号遺跡』 2013年
- (27) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塙遺跡』 2013年
- (28) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重1号遺跡』 2013年
- (29) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第26～31・32号古墳』 2013年
- (30) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（30）岡東第1号横穴墓・岡東第1～7号古墳・岡1号遺跡・岡2号遺跡・只野原1号遺跡・半戸1号遺跡』 2013年
- (31) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31）風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014年
- (32) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）宮の本遺跡・宮の本第11・33～35号古墳』 2014年
- (33) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33）箱山第3～6号古墳』 2014年
- (34) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34）下矢井南第3～5号古墳』 2014年
- (35) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（35）若見追遺跡・煙尻遺跡』 2014年
- (36) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36）三隅山遺跡』 2014年
- (37) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37）頓藤城跡』 2014年
- (38) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）杉谷遺跡』 2014年

II 位置と環境

杉谷遺跡は、広島県のほぼ中央に位置する世羅郡世羅町に所在する。世羅町は旧世羅町・甲山町・世羅西町が合併した町で、東西 27 km・南北 15 km の東西に長い町域をもつ。地勢は標高 400 ~ 600 m の世羅台地の中心で、周縁には鷺ノ巣山（標高 992 m）をはじめ標高 700 ~ 900 m 級の山が連なる。ここを水源とする河川は、芦田川・沼田川・江の川という主要河川となって流下しており、県内における分水嶺の 1 つとなっている。旧世羅町や旧甲山町の大半では芦田川水系の河川が西から東に台地面を浸食しながら流れ、甲山盆地などの山間盆地を形成している。遺跡は、甲山盆地の東端付近（旧甲山町に含まれる）に位置する。

世羅町は中世莊園である高野山領大田莊に当たっており、町内には康徳寺古墳を始めとする多くの古墳のほか、石仏・石塔群や中世寺院跡など古代中世の文化財が多く残されている。ここでは、旧甲山町を中心に歴史的環境についてみていく。

旧石器・縄文時代 旧石器時代や縄文時代早期・前期の遺跡は確認されていない。中期以降では、頓迫 1 ~ 3 号遺跡⁽¹⁾（川尻）で中期後半～晚期の土器片や石鏃・スクレイパーなどが採集され、高山 1 号遺跡⁽²⁾（別迫）でも晚期後半とされる平底の壺・浅鉢・深鉢や丸底の深鉢が出土している。また、川尻の地入堂では後期以降に現れる独鉛石が出土している。

弥生時代 この時代に入ると、多くの遺跡が確認されている。このうち、前・中期の遺跡として金井原遺跡⁽³⁾（川尻）や乙川北遺跡⁽⁴⁾（小世良）が調査されている。金井原遺跡は中期の集落跡で、拡張を繰り返した円形の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と共に木棺墓群を検出し、土器片・紡錘車や石鏃が多く出土した。乙川北遺跡では前期の貯蔵穴や中期の竪穴住居跡を検出したほか、後期の墓坑群や円形周溝墓なども明らかになっている。このほか、新山遺跡（赤屋）や比恵谷遺跡（川尻）などで土器や石斧などが出土している。

後期以降の遺跡としては、調査が行われた近森遺跡（伊尾）や下川尻遺跡⁽⁵⁾（川尻）をはじめ、龍王山 1 号遺跡（伊尾）・日向遺跡（川尻）・総田遺跡（東上原）・迫谷山遺跡（宇津戸）などがある。近森遺跡は終末期～古墳時代初頭の集落跡で、竪穴住居跡から山陰系瓶形土器や土製勾玉が出土した。下川尻遺跡も同時期の集落跡で、円形と方形の住居跡が調査された。このほか、乙川東遺跡（小世良）では柱穴群が、龍王山 2 号遺跡⁽⁶⁾（伊尾）では後期後半の分銅型土製品が、円光地遺跡（西上原）では終末期の土器が明らかになっている。

古墳時代 世羅町は 850 基を超える古墳を有する古墳密集地であり、旧甲山町内でも多くの古墳が存在する。前・中期と考えられる古墳として、龍王山第 1 ~ 5 号古墳（伊尾）・龍王山南第 1 号古墳（同）・日向古墳（川尻）・中山古墳（西上原）・松が鼻古墳群（宇津戸）などがあり、いずれも箱式石棺を埋葬施設としている。調査の行われた龍王山第 2 号古墳⁽⁷⁾では、石棺内で人骨やガラス小玉が出土している。なお、2 段築造された大型の墳丘（直径 18 ~ 21 m）をもつ灰塚古墳群（赤屋）もこの時期の可能性がある。



1 彩谷遺跡	2 高山1号遺跡	3 近森遺跡	4 龍王山2号遺跡	5 龍王山1号遺跡	6 下川尻遺跡	7 比谷遺跡
8 日内遺跡	9 細田遺跡	10 霧高下遺跡	11 新山遺跡	12 金井原遺跡	13 迫谷山遺跡	14 乙川東遺跡
15 乙川北遺跡	16 円光地遺跡	17 長土路古墳群	18 大谷山西古墳	19 龍王山南古墳群	20 龍王山古墳群	21 石堂山古墳
22 草田古墳	23 城ヶ平古墳	24 下川尻古墳群	25 日向古墳	26 日向山古墳	27 灰冢古墳群	28 大子櫛遺跡
29 横山古墳	30 茶臼山古墳	31 時森古墳群	32 追谷山古墳群	33 中山古墳	34 有美古墳	35 良吉古墳群
36 長土路遺跡	37 石堂山遺跡	38 風呂ヶ谷遺跡	39 石九谷遺跡	40 時森遺跡	41 祝山2号遺跡	42 円光寺跡
43 高山2号遺跡	44 大原遺跡	45 今高野山	46 高山城跡	47 砂走城跡	48 宮地城跡	49 久代城跡
50 真砂丸城跡	51 松岡城跡	52 宇根城跡	53 茶臼山城跡	54 山手城跡	55 今高野山城跡	56 沿城跡
57 大通上居遺跡	58 石堂山古墓群	59 日向古墓群	60 大柳遺跡	61 横山古墓	62 良谷古墓	63 乙川古墓

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)

※点線は推定範囲

横穴式石室を有する後期の古墳としては、長土路古墳群（東上原）・龍王山南第2～8号古墳（伊尾）・下川尻古墳群（川尻）・時森古墳群（同）・迫谷山古墳群（小世良）のように群を成すものと、石堂山古墳（伊尾）・城ヶ平古墳（同）・大谷山西古墳（同）・日向山古墳（川尻）・有実古墳（西上原）・池の奥古墳⁽¹⁰⁾（宇津戸）のように単独で存在するものがある。確認された石室は長さ1.3～8.6mのもので、龍王山南第4・5号古墳と池の奥古墳が調査されている。前者は直径7～8mの円墳で、奥行4.5～6.4mの石室を有し、6世紀末～7世紀初頭の築造とされる。後者は直径10mの円墳で、長さ7mの石室内から耳環等が出土し、7世紀前半の築造とされる。このほか、周辺では草田古墳（伊尾）・茶臼山古墳（西上原）・横山古墳（赤屋）があるが、時期や埋葬施設は不明である。

古墳時代の集落跡として、龍王山2号遺跡では前期の堅穴住居跡・土坑・貯蔵穴などが確認され、同じ山陰系土器が出土した近森遺跡と併存した集落の可能性がある。中草田1号遺跡（別追）でも堅穴住居跡が確認されたほか、土師器が出土した石堂山遺跡（伊尾）・時森遺跡（川尻）、土師器と須恵器が混在する石丸谷遺跡（川尻）・風呂ヶ谷遺跡（同）・祝山2号遺跡（甲山）、須恵器が出土した長土路遺跡（東上原）などがある。

古代 「和名抄」によると、古代世羅郡には桑原郷・大田郷・津口郷・鞆張郷の4郷があり、桑原郷は伊尾に残る「桑原」の地名から旧甲山町に、残り3郷は旧世羅町一帯に比定されている。当時期の集落跡は明らかでないが、円光寺跡は平安時代の寺院跡とされ、付近で布目瓦が出土している。高山2号遺跡⁽¹¹⁾（別追）の総柱建物跡は出土遺物から古代以降とされ、大原遺跡（川尻）では古代の須恵器、乙川北遺跡では綠釉陶器片が出土している。

中世 中世になると、世羅町を中心に広大な荘域を誇る大田荘が文献に現れる。大田荘は、平安時代後期に橘氏が開発・支配していた桑原郷と大田郷を併せて平重衡に寄進したのが始まりで、後に後白河院領、平家滅亡後は高野山領となり、経営の拠点として今高野山が置かれた。しかし、開発領主の系譜を引く橘氏や地頭の三善氏との確執が続き、南北朝の動乱以後は備後国守護山内氏の進出によって高野山の大田荘支配が揺らぐと、備後北部の三吉氏・和智氏や備後南部の杉原氏・小早川氏など周辺勢力の侵入を招いた。応仁の乱を契機に、周防の大内氏や尼子氏の侵攻も始まり、大田荘域はますます抗争の舞台となるが、16世紀半ば新たに台頭した毛利氏が世羅郡一帯を支配下に置いていく。

中世の遺跡として、山城跡・居館跡・寺院跡・古墓などが多く残っている。山城跡には大規模なものではなく、城主や築城の時期・経緯が不明なものが多い。県史跡・今高野山（甲山）の背後に所在する今高野山城跡（甲山・本郷）は主郭の南北に小郭を配しており、北側には2つの出丸、南側に堀切を設けている。城主は和智氏といわれ、沼城跡に居館があったとされている。小世良城跡（小世良）は2つの郭群を有し、堀切や土塁などを設けている。杉谷遺跡の近くでは、郭群と2条の堀切をもつ宇根城跡（東上原）や郭に土塁を設けた茶臼山城跡（西上原）がある。このほかにも、久代氏の拠点といわれる久代城跡（東上原）をはじめ、鳶が丸城跡（伊尾）・宮地城跡（同）・砂走城跡（赤屋）・松岡城跡（川尻）・山手城跡（小世良）などの城跡が知られている。

居館跡としては、変形五角形の屋敷地をもつ沼城跡や室町時代の掘立柱建物跡や溝などが調査された大通土居屋敷跡がある。⁽¹⁴⁾また、町内各地に五輪塔や宝篋印塔、積石塚などがみられる。このうち、楨山古墓（赤屋）⁽¹⁵⁾や大柳遺跡（東上原）⁽¹⁶⁾で調査が行われている。前者は直径 11m の円墳を再利用して中央部に宝篋印塔を据えたもので、埋葬構造が存在しないことから供養塔的な性格が窺える。後者は 2 段の平坦面に 6 つの基壇を設けたもので、その周辺には石仏と散在する五輪塔の石材を検出した。遺物は土師質土器・古錢・大量の瓦等が出土しており、室町時代後半を中心に営まれたものと考えられている。



▲ 大柳遺跡の石仏と散在する五輪石

註

- (1) 小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第5集 芸備友の会 1977年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『高山1・2号遺跡』1992年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『金井原遺跡発掘調査報告書』2009年
- (4) 世羅町教育委員会『乙川北遺跡』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『近森遺跡』2008年
- (6) 世羅町教育委員会『下川尻遺跡』2008年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山2号遺跡』1997年
- (8) 古墳以外に墳墓として、箱式石棺を有する高山西遺跡（赤屋）や土壙墓を有する大子園遺跡（同）があり、弥生～古墳時代のものと推定されている。
- (9) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図V（御調郡・世羅郡）』1998年
かつて龍王山古墳と呼称したが、当書で遺跡名称の変更・統一がなされ、龍王山第2号古墳に変更した。
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池の奥古墳』2008年
- (11) 龍王山古墳群発掘調査団『龍王山古墳群 第9号古墳・第10号古墳の発掘調査報告』1971年
龍王山第2号古墳と同じく註8において、龍王山第9・10号古墳は龍王南第4・5号古墳と変更した。
- (12) 長土路遺跡の場所は林 光輝氏（世羅町教育委員会社会教育課）の御教示による。
- (13) 註2に同じ。
- (14) 甲山町教育委員会『大通土居屋敷跡』1997年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『楨山古墓』2006年
- (16) 財団法人広島県教育事業団「大柳遺跡」『年報9 平成23年度』2012年

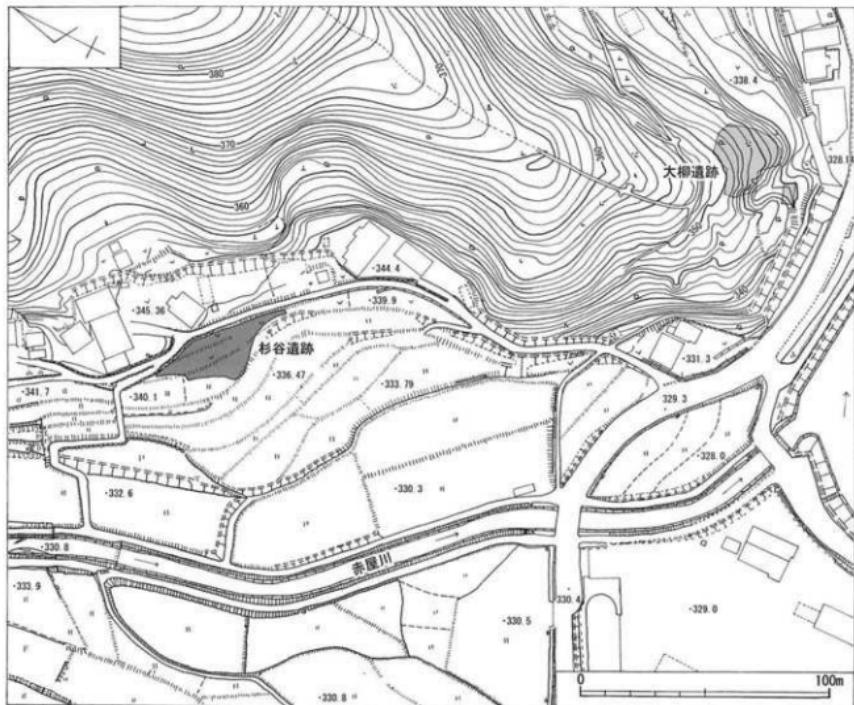
参考文献

- 広島県教育委員会ホームページ『広島県遺跡地図』(<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/list526-2231.html>)
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第3集 1995年
甲山町『甲山町史』資料編 I 2003年

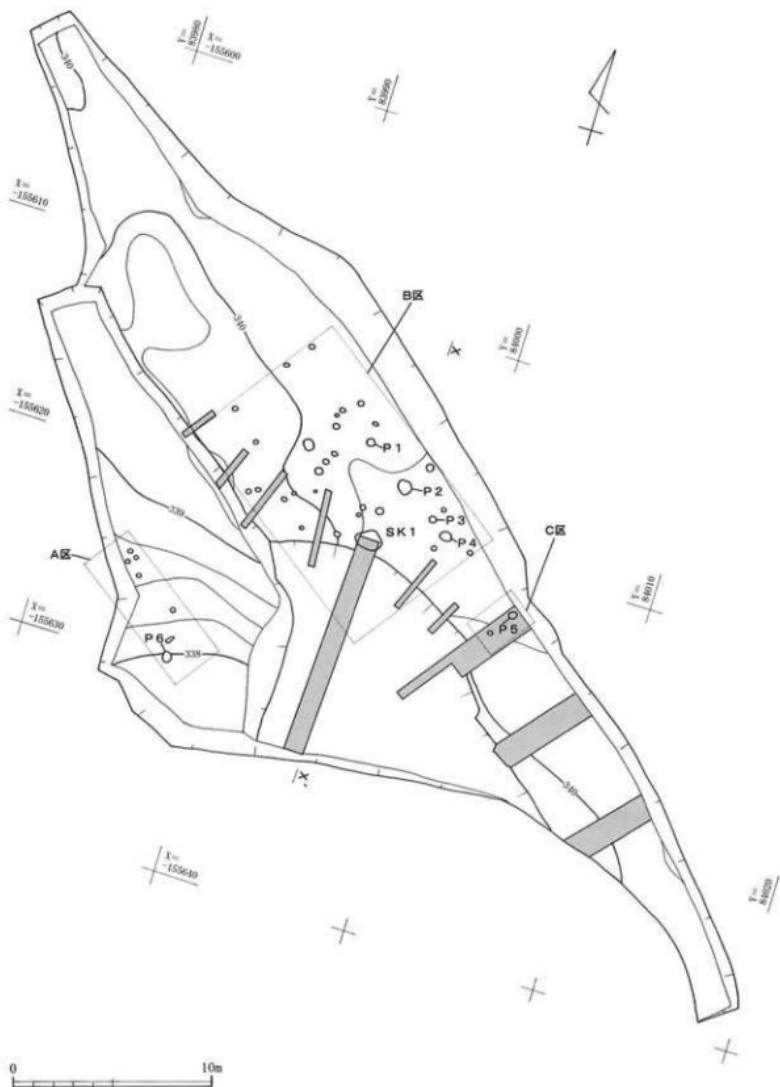
III 調査の概要

杉谷遺跡は、世羅郡世羅町にある中世を中心とした遺跡である。芦田川支流の赤屋川と芦田川の合流地点の北側に広がる丘陵の西斜面裾部（標高339～342m）に立地し、現状は田畠となっていた。周辺には弥生時代から中世までの遺跡が点在する。調査面積は870 m²で、遺構検出面付近までは重機による掘り下げを行ない、遺構の検出及び掘り下げ作業は人力で行なった。

調査の結果、古墳時代の土坑1基、中世を中心とした柱穴群、遺物包含層が明らかとなった。遺物は、土坑から須恵器蓋杯6点と白玉2点、柱穴群や包含層から土師質土器を中心に、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・須恵質土器・瓦器・青磁・白磁・備前焼・近世陶磁器などの小破片及び石製品1点が出土した。



第3図 周辺地形図 (1 : 2,000)



第4図 遺構配図 (1 : 250) 崩アミ掛けは試掘トレンチ

IV 調査の成果

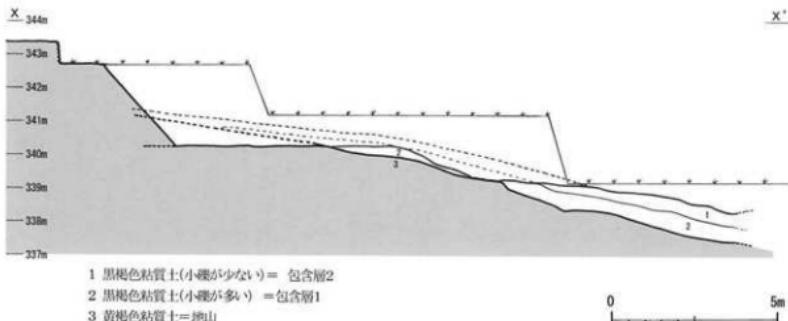
1 立地と現状

遺跡は、北から南に流れる赤屋川が本流の芦田川に合流する地点の北約 220mに位置する。赤屋川の氾濫原から東に一段高い場所で、東の山塊（標高 439.9m）裾部の氾濫原に張り出した緩斜面に立地する。標高は 339～342mで、小高い立地は河川の氾濫を避けつつも水利を確保する上で適度な環境といえ、集落跡等の存在が想定されていた。

調査前は 3 段程度に造成された段々畑となっており、この造成等の影響を受けて遺跡も大きく上下 2 段に分かれている。

2 基本層序と包含層（第5図）

調査区内の層位をみると、田畠造成に伴う掘削により調査区の北半では地山が露出していた。地山となっているのは粘性の弱い黄褐色粘質土で、大小の礫を多く含むことから上方からの土石流が堆積した可能性がある。南に向けて傾斜する南半では、地山上に 2 層の包含層を確認した。下層（包含層 1）は小礫を多く含む黒褐色粘質土で、厚さは最大 60cm である。調査区北端の段々畑造成による掘削面（高低差約 2.5m）に当層が確認できなかったことや検出状況から、標高 340.8m 付近より谷側に向けて堆積したものと推測される。遺物は弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土した。上層（包含層 2）も黒褐色粘質土であるが、下層に比べると小礫が少なく、厚さは最大 55cm である。標高 339m 付近で検出したが、先ほどの掘削面に当層（標高 341.1～341.3m）が確認できることから、調査区よりも上方から谷にかけて堆積し、田畠の造成で削平を受けたものと考えられる。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・青磁・白磁・近世陶磁器などの破片が出土した。その上層は田畠造成に伴う客土や耕作土が 0.2～2.5m ほど堆積していた。

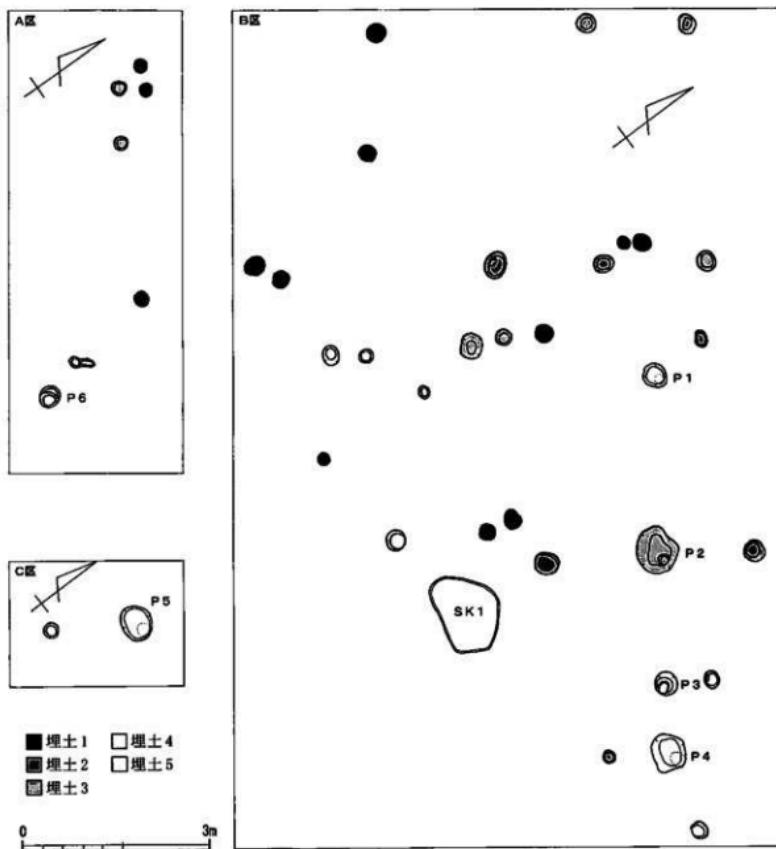


第5図 杉谷遺跡断面想定図 (1:150)

3 遺構

(1) 柱穴群 (第4・6・7図、図版2)

検出した柱穴は約40基で、分布は調査区北東と南西に分かれる。地山や包含層を掘り込んでおり、規模は直径0.2~0.75m・深さ0.05~0.7mである。柱穴内の埋土は〔1〕暗灰褐色、〔2〕淡暗灰褐色、〔3〕茶褐色、〔4〕淡茶褐色、〔5〕地山混じりの茶褐色の5種があり、時期差が想定される。埋土2・5の柱穴は北東部に集中するが、埋土1・3・4の柱穴は全域に混在して分布する。柱穴の中で、P1~6(埋土3~5)は底面形状や埋土に直径15~30cmの柱根跡があり、このうち類似した埋土(埋土3・5)をもつP1~5は北東部に位置し、直線的に並んでいる。



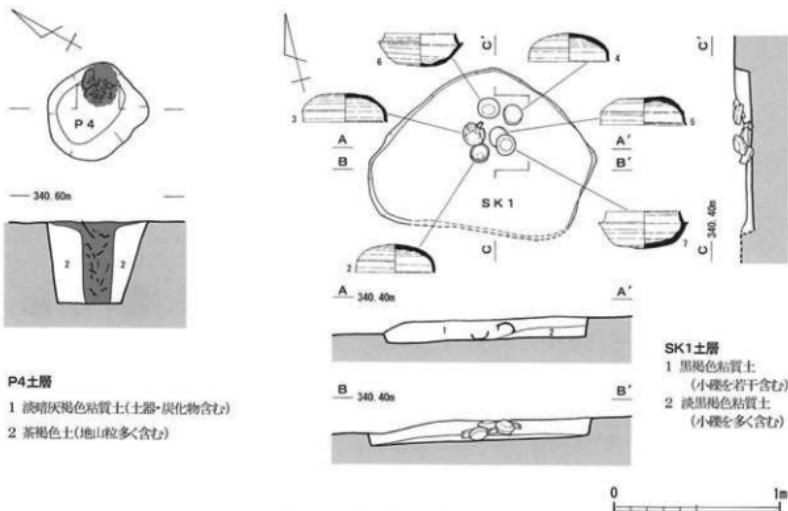
第6図 柱穴群実測図 (1:80) ※P1~4・5の点線は柱根跡

その他の柱穴は埋土の色や規模、並びを検討したが、建物跡等を想定することができなかった。

出土遺物は、P4 の埋土から須恵質土器の甕（1）や亀山焼の破片が比較的多く出土したほか、土師質土器などの小片が出土している。その他の柱穴からも土器の小片が出土しているが、包含層を掘り込んだ柱穴は同層内の遺物が混入した可能性が高い。

（2）土坑（第7図、図版3）

SK1は平坦部から谷へ向かう傾斜変換部に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は南北方向 1.05m・東西方向 1.37mで、深さは最大 0.1mである。包含層1をほぼ垂直に掘り込んでおり、底面は北東から南西に向けてやや傾斜し、その上には小礫を密に含む淡黒褐色粘質土、小礫を若干含む黒褐色粘質土が順次堆積する。遺物は、土坑底面のやや北寄りで須恵器蓋杯6点（2～7）と滑石製小玉2点（8・9）が出土した。須恵器は、底面中央に杯身（2）が仰向けに置かれ、その北端に乗る形で杯身（3）が伏せてある。その東側では杯蓋（5）に杯身（7）が共に伏せた状態で重なっている。さらにその北側に杯身（6）、杯蓋（4）が共に伏せて置かれている。また、杯身（7）の南端で小玉（8）が出土しており、小玉（9）も蓋杯群の下層で出土している。



第7図 P4 及びSK1実測図 (1:30)

4 遺物

(1) 柱穴群の出土遺物（第8図、図版4）

柱穴から出土した遺物の中で、明らかに造構に伴うもので図示可能であったのは、P4出土の須恵質土器の甕1点のみである。

須恵質土器（1） 甕の口縁～肩部で、肩部から緩やかに外反し、口縁端部は上下にやや拡張している。肩部には粗い平行タタキ目が残っており、体部内面にはヘラケズリを施している。胴部の破片も多く出土したが、2～3枚に剥がれる割れで、接合できなかった。焼成不良のため軟質であり、色調は赤褐～黒褐色を呈する。

(2) 土坑の出土遺物（第8図、図版4）

土坑から出土したのは、須恵器蓋杯の蓋4点・杯身2点及び白玉2点である。

須恵器（2～7） 2～5はほぼ完形の蓋である。口径 11.9～12.8 cm、器高 4.2～4.3 cm で、概ね丸みを帯びた天井部から内湾し、垂下して端部はわずかに外反気味となる。2～4は稜を回線状の線によって造り出し、口縁端部の内傾した平坦面にも回線をめぐらせており、5よりもやや丸みの強い天井部をもつ。5は稜がやや突出し、口縁端部が尖り気味である。色調は淡灰色～濃灰色で、2は最も明るく、5はやや暗い。

6・7はほぼ完形の杯身で、口径 10.5～11 cm、器高 5～5.5 cm とほぼ同じ大きさあるが、6はやや薄手である。両者ともわずかに丸みを帯びた底部から内湾気味に開き、ほぼ水平な受部に至る。受部からの立ち上がりは内傾気味で、口縁端部はやや尖る。調整は全て外面が回転ヘラケズリ、内面がやや強いロクロナデである。大きさ・形状・色調から、「4と6」「5と7」というセット関係が想定される。

白玉（8・9） 完形の薄い滑石製白玉で、色調は暗緑灰色である。直径 5 mm・厚さ 2 mm の8に対し、9は直径 5.5 mm・厚さ 2 mm とやや大きく、外面の稜も明瞭である。

(3) 調査区内の出土遺物（第8・9図、図版4～5）

包含層で出土した土器は土師質土器が最も多く、他は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、須恵質土器、瓦器、輸入磁器、備前焼、近世陶磁器などで、ほとんどが小片である。

縄文土器（10） 表面が摩耗しているが、深鉢の口縁部である。丸い口縁下に刻目を入れた突帯を貼り付けている。色調は赤褐色で、胎土に粗い砂粒を多く含んでいる。

弥生土器（11・12） 11は甕の口縁～肩部で、頭部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに拡張する。調整は摩耗によって確認できない。12は底部で、外底面をやや窪ませ、ヘラミガキを施している。

土師器（13・14） 13は高杯脚部で、杯部との接合面や脚部の内面を指で抉って整形し、外面にはナデを施している。14は手捏ね土器で、口縁部の厚みは一様でなく、外面にハケ目のような痕跡がある。

須恵器（15～18） 15は復元口径8.25cm・器高1.7cmの小皿と考えられる。口縁端部はやや屈曲して開き、底部は回転ヘラ切りで、外底面に明瞭な指頭圧痕がみられる。16は椀で、体部外面に回転ナデによる明瞭な稜線があり、底面には板状圧痕がある。17・18は台付椀の底部で、底径は6.6～7.0cmと推測される。台部高は0.65cmで、高台内はわずかに上げ底気味である。

須恵質土器（19） 壺の口縁～頸部である。頸部は「く」の字状に開き、口縁端部は矩形を呈する。体部外面には平行タタキ目を施している。P4出土の1に比べると焼成が良好で、淡い灰白色を呈する。

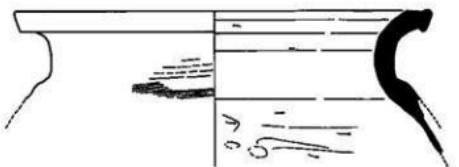
瓦器（20～22） 20は椀で、内外面ともナデを施している。21も椀で、底部を欠損する。外面はナデを施し滑らかな上半に対し、下半は指頭調整によって凹凸が目立つ。内面はヘラミガキを施す。22は小型壺の口縁部で、肩部から「く」の字状に開き、口縁端部は上下にやや拡張する。内外面ともロクロナデを施し、肩部にはわずかにハケ目が確認できる。

土師質土器（23～36） 23～33は皿類で、口径5.9～9.8cm・器高1.1～2.0cmの小皿（23～30）と口径10.6～13.9cm・器高2.4～2.5cmの皿（32・33）に大別され、底部には回転糸切り、体部内外面には回転ナデがみられる。小皿は底面からの開きが大きいA類と開きの小さなB類に大別され、前者は深さの浅いA1類と深さの深いA2類に分かれる。A2類はさらに直線的に開く（a）と内湾気味に開く（b）に分類でき、A1類=28・31、A2a類=23・26・29、A2b類=24・25・27、B類=30、となる。皿は体部が小皿より内湾気味に開き、33は体部外面に強いナデを施し、稜が明瞭である。34は器高や口径が大きいことから杯に分類される。内外面に丁寧な回転ナデを施す。35は柱状高台の椀と考えられる。底径5.4cm、台高は0.9cmで、高台部外面は括れている。底面は回転糸切り離しで、内外面はナデを施している。36は小型の鍋で、体部下半以下を欠損する。直線的な体部上半にやや内湾気味の口縁部が付き、平坦な口縁端部はやや内傾する。体部外面には縦方向、内面には不定方向に粗いハケ目を施す。

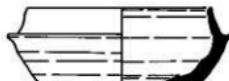
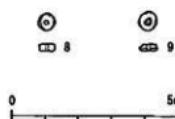
輸入磁器（37～42） 白磁（37・38）と青磁（39～42）がある。37・38は椀の口縁～体部上半で、直線的な体部と丸みのある端部をもつ。共に釉垂れがみられ、37は裏地が斑点状に透けるなど、やや粗雑な造りである。青磁はやや胎色がかった緑釉をもつ同安窯系（39・40・42）と青味がかった緑釉をもつ龍安窯系のもの（41）がある。39は小皿で、口縁端部を欠損する。底面は平坦で、内面には櫛齒状工具による猫搔文を施す。40は椀で、内面は猫搔文を、外面には直線的な櫛齒文を施し、外底面付近には釉がない。41は体部下半を欠損する椀で、内面に二条の沈線と画花文がみられる。42は椀の底部で、体部と見込みの境に不明瞭な段を入れている。

石製品（43） 厚さ2.5mmの薄い粘板岩製の石板を転用した石製品で、滑らかな表面や直線的に加工された左縁側は石板の名残りとみられる。右縁側部は敲打によって加工され、所々に穿孔の痕跡らしきものもみられる。中途な加工痕や形状から、未完のまま廃棄されたものと考えられる。

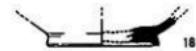
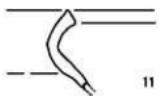
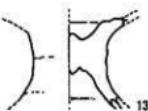
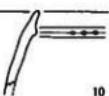
P4



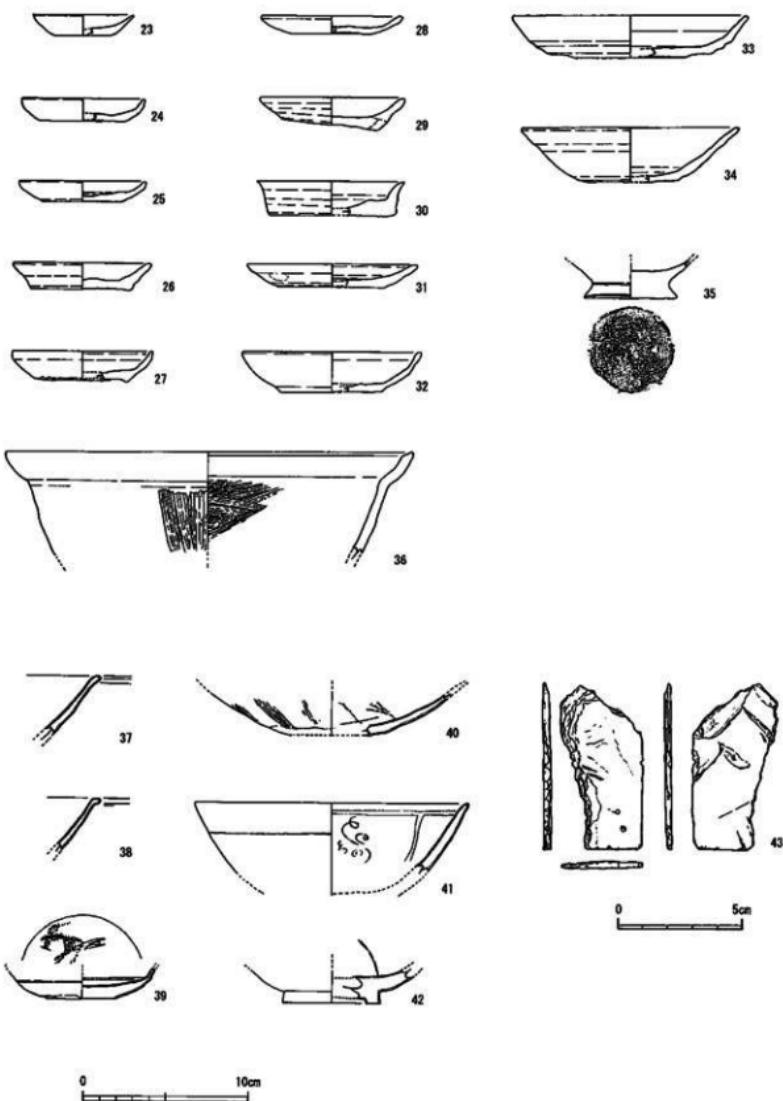
SK1



七合器



第8図 出土遺物実測図 (1 : 3, 2 : 3)



第9図 出土遺物実測図 (1:3, 1:2)

第2表 出土遺物観察表（土器）

※ 口径や底径は全て復元したものである。

報告番号	出土遺構及び地点	種別	器種	法量(最大幅/cm) ① 口径 底径 厚さ 横高				手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
				横幅外-タタキ、頭内-ヘラグ ズリ後ナデ、体内-指頭調整	外-回転ヘラ削り-回転ナデ	内-回転ナデ	外-回転ヘラ削り-回転ナデ					
1 P 4	須恵質土器	甕	25.6	20.6	-	8.8+			普通	不良	黒褐色～赤褐色	東播系
2 SK1	須恵器	杯蓋	11.9	-	-	4.2			精良	普通	淡灰色	斑状の自然釉
3 SK1	須恵器	杯蓋	12.6	-	-	4.3			精良	普通	灰色	
4 SK1	須恵器	杯蓋	12.1	-	-	4.3			精良	普通	灰～茶灰色	
5 SK1	須恵器	杯蓋	12.8	-	-	4.25			精良	普通	濃灰色	
6 SK1	須恵器	杯身	10.5	-	-	5.0			精良	普通	灰色	4とセット関係
7 SK1	須恵器	杯身	11.0	-	-	5.5		外-回転ヘラ削り-回転ナデ、 内-回転ナデ	精良	普通	濃灰色	5とセット関係
10 B 区	純土器	深鉢	-	-	-	4.6+	外-一側目突窓	内-ナデ	粗砂粒多い	不良	褐色	
11 B 区南側	弥生土器	甕	-	-	-	4.6	内外-ナデ		粗砂粒含む	普通	褐色	
12 B 区南側	弥生土器	底部	-	-	4.5	2.2+	内外-ナデ、指頭調整		粗砂粒含む	普通	褐褐色～暗褐色	
13 B 区	土師器	高杯	-	4.4	-	5.2+	内外-ナデ		粗砂粒含む	普通	赤褐色	円盤充填
14 B 区	土師器	手捏	4.6	-	-	(3.7)	外-一指頭調整、ナデ		粗砂粒含む	普通	黄褐色～暗褐色	体部に工具の引抜痕
15 B 区南側	須恵器	小皿?	8.25	-	-	1.7	内-外-回転ナデ、指頭調整		精良	普通	灰色	須恵質土器の可能性あり
16 B 区南側	須恵器	碗	-	-	6.3	3.5	内-外-回転ナデ		精良	普通	灰色	
17 B 区	須恵器	碗	-	-	6.6	1.65+	内-外-回転ナデ		精良	普通	淡灰色	
18 C 区南側	須恵器	碗	-	-	7.0	1.5+	内-外-回転ナデ		精良	普通	淡灰色	
19 B 区南側	須恵質土器	甕	-	-	-	8.8+	頭肩外-タタキ、体内-指頭調整 頭へ口縁回転ナデ		精良	普通	淡灰～褐灰色	東播系。1と同じ窓?
20 B 区南側	瓦器	杯	8.0	-	-	1.7+	外-回転ナデ、内-ヘラミガキ		精良	普通	内-黒色 外-淡灰色	
21 B 区	瓦器	碗	10.8	-	-	4.5+	外-上-回転ナデ、外下-ナラ テ、ヘラミガキ、内-ヘラミガキ		精良	普通	黒灰色	
22 C 区南側	瓦器	甕	14.3	-	-	2.4+	内外-回転ナデ		精良	普通	黒灰色	
23 B 区	土師質土器	小皿	5.9	-	4.0	1.25	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	褐色	
24 C 区南側	土師質土器	小皿	7.3	-	-	5.5	1.4	内外-回転ナデ、底-回転糸切り	精良	普通	淡褐色	
25 B 区	土師質土器	小皿	7.4	-	4.7	1.2	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色～褐色	
26 C 区	土師質土器	小皿	8.15	-	5.4	1.65	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色～褐色	
27 B 区	土師質土器	小皿	8.35	-	5.5	1.8	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色～褐色	
28 B 区	土師質土器	小皿	8.1	-	4.2	1.1	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色	
29 B 区南側	土師質土器	小皿	8.6	-	5.9	1.9	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色	
30 B 区	土師質土器	小皿	8.2	-	7.5	2.0	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色～褐色	
31 C 区南側	土師質土器	小皿	9.8	-	6.4	1.35	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	褐色～淡赤褐色	外壁に赤色顔料跡布?
32 B 区南側	土師質土器	皿	10.6	-	6.0	2.4	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡褐色～暗褐色	
33 B 区	土師質土器	皿	13.9	-	10.0	2.5	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡褐色	
34 B 区南側	土師質土器	杯	12.9	-	6.1	3.3	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色～褐色	
35 B 区	土師質土器	碗	-	-	5.4	2.1+	内外-回転ナデ、底-回転糸切り		精良	普通	淡黄褐色	柱状高台
36 B 区南側	土師質土器	碗	24.3	-	-	6.0+	口縁内外-回転ナデ、体外-縦 ハケ、体内-不定方向ハケ		精良	普通	灰褐色～暗褐色	
37 B 区	白磁	碗	-	-	-	3.5+			精良	普通	白色	釉垂れ
38 B 区	白磁	碗	-	-	-	3.2+			精良	普通	淡褐色	釉流れ
39 B 区南側	青磁	小皿	-	-	4.2	1.85+	底内-猫縞文		精良	普通	淡灰色	
40 C 区南側	青磁	碗	-	-	4.95	2.45+	内-猫縞文、外-繡文		精良	普通	淡褐色	
41 B 区南側	青磁	碗	16.4	-	-	4.2+	内-圓花文		精良	普通	青灰色	
42 C 区	青磁	碗	-	-	-	5.8	2.0+ 体部と見込みの境に不明瞭な段		精良	普通	濃青灰色	

第3表 出土遺物観察表（石製品）

報告番号	出土遺構	器種	測定値(最大幅/mm, g)					石材	備考	
			長さ	幅(径)	孔径	厚さ	重量			
8 SK1	白玉	-	-	5.0	1.0	2.0	0.10	滑石	硬かやや不明瞭	
9 SK1	白玉	-	-	5.5	1.5	2.0	0.11	滑石		
43 調査区内	石製品	65.0	33.0	-	-	2.5	14.57	粘板岩	石板(砥石?)を転用したもの。性格不明	

V まとめ

1 出土遺物について

調査区内で出土した遺物のほとんどは土器で、古くは縄文土器から中近世の陶磁器まで幅広いが、明らかに造構に伴うものはP 4及びSK 1の出土遺物である。

P 4から出土した須恵土器の甕(1)は、赤味を帯びており、焼成が不良である。形態的に東播系須恵器の特徴が窺え、町内では高山1・2号遺跡⁽¹⁾で同形態の土器片が出土している。包含層で出土した須恵土器の甕(19)も同じようなタキ調整がみられることから、東播系の可能性がある。

SK 1の出土遺物は須恵器蓋杯と白玉である。杯蓋は稜の退化状態や口縁端部の特徴から5と2~4に大別され、後者がやや先行する時期のものである。杯身は受部からの立ち上がりが長いものの、やや内傾する点が特徴である。これらは田辺昭三氏の陶邑編年MT 15形式に比定され、6世紀前葉を中心とした時期が想定できる。三次市の綠岩古墳や東広島市の金口第1号古墳で類例が確認できる。

白玉は2点で、共に滑石製である。滑石製品は祭祀遺物とされ、古墳時代中期に多くみられる。県内では杉谷遺跡以外に古墳12例と集落跡等4例で出土が確認できるが、白玉を呈する白玉が確認できたのは11例である(第5表)。その多くは古墳の堅穴系埋葬施設からの出土であり、集落跡等の出土は少ない。白玉は直径3.0~6.0cmで、厚型と薄型のものが混在する場合が多い。稜にも強弱の差があり、杉谷例はやや大型・薄型の稜が弱いタイプといえる。出土数は2~357点で、4つの古墳に多量副葬されている。杉谷例は最少の出土数であるが、共伴した須恵器から祭祀的な用途が想起される。岡ノ段C例の様相をふまえると、広島県における滑石製白玉は5世紀に盛んに使用され、5世紀後半以降になると古墳の副葬品以外に集落等の祭祀にも使用されるようになったと考えられる。

第5表 広島県内の白玉を出土した古墳及び遺跡

No.	所在地	古墳・遺跡名	時期	埋葬施設・造構	出土位置	出土数	法量(mm)※1			文献
							縦	孔径	厚さ	
1	三次市吉舎町	三五1	5c後半	堅穴式石室	?	357	4.5~6.0 (1.25~1.8)	3.0~3.65	※2	1
2	三次市向江田町	椎現2 SK1	5c	轍床+箱式石棺	頭~頸部	32	4.0~6.0 4.0~5.2	1.5~2.0 1.5~2.0	1.5~3.5 1.2~3.2	2
3	三次市向江田町	椎現3 SK1	5c	箱式石棺	頭部	20	4.0~5.2 5.0~5.5	2.0 2.0	1.2~3.2	
4	三次市向江田町	難山1 SK5-5	5c前半	石蓋土坑	頭部?	5	3.5~4.3 3.5~4.0	1.1~1.6 1.0~1.5	1.8~3.2	小児墓
5	庄原市板橋町	御堂西2	5c中頃	木棺	不明	18	3.5~4.0	1.0~1.5	2.0~3.5	4
6	福山市加茂町	吹越3	5c前半	木棺	頭部	144	3.0~4.95 3.0~4.95	1.7~2.2 1.7~2.2	1.77~4.56	形骸化した枯土標?
7	山陽郡安芸太田町	板迫山1	5c中頃	木棺	?	8	(3.5~5.5) (1.0~1.5)	(1.5~3.0)		6
8	広島市安佐北区	恵下2	5c後半	轍床+木棺	棺内	139	3.6~3.75 (0.95~1.4)	2.2~2.45	※2	7
9	広島市安佐南区	池の内3	5c中葉	剖竹形木棺	足部	216	3.5~4.2 3.5~4.2	1.5~1.9 1.5~1.9	1.9~2.3	※2
10	広島市安佐北区	弘住2	5c後葉 ~6c前葉	轍床+剖竹	頭部	9	5.2~5.7 5.2~5.7	2.1~2.4 2.1~2.4	2.7~4.8	9
11	山県郡北広島町	岡の段C	5c末 ~6c初	祭祀造構	東半	18	4.0~6.0 4.0~6.0	1.0~2.5 1.0~2.5	1.5~4.5 SX3と調査区で出土	10
12	世羅郡世羅町	杉谷SK1	6c前葉	土坑	中央北	2	5.0~5.5 5.0~5.5	1.0~1.5 1.0~1.5	2.0	須恵器蓋杯6が共伴 本西

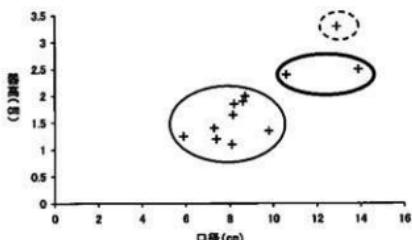
※1 ()は著者の計測によるものである。

※2 図示のあるものは一部であり、白玉形態が確認できるものを計測した。

遺構に伴わない遺物の中で、縄文土器は特徴から晩期後半の深鉢と考えられ、同町内の高山⁽⁶⁾1号遺跡で類例が出土している。弥生土器は弥生時代後期後半のものと思われ、周辺では日向遺跡⁽⁷⁾や龍王山2号遺跡の出土遺物に類似したもののが確認できる。土師器は高杯脚部と手捏ね土器の破片で、弥生土器に色調は似ているが、胎土はよりきめ細かくなる。近森遺跡や龍王山2号遺跡でも類似した手捏ね土器が出土している。須恵器の皿・碗類は平安時代のもので、大原遺跡（東上原）⁽⁸⁾でも古代の須恵器が出土している。

土師質土器は、皿類を中心に杯・碗・鍋がみられ、柱状高台碗も1点出土している。いずれも回転糸切りで、法量・形態・技法が高山1・2号遺跡の出土例に類似する。福山市・草戸千軒遺跡における分類に対比してみると、皿類は法量から小皿（5.6～9.8 cm）と皿（10.6～13.9 cm）に大別され、皿A類・皿A I～III類に比定でき、草戸II期後半～IV期（14世紀中葉～16世紀初頭）までの時期に並行するものと考えられる。ただし、浅い形態のものは草戸編年IV期以降を含む可能性もある。小型の鍋はわずかに内湾する口縁部が鍋B・C類の折衷的特徴で、草戸IV期前半（15世紀後半）の特徴に近い。柱状高台は、古代末から中世にかけてみられるもので、古代を含む時期幅から「土師器」とする場合もあるが、杉谷例は他の土師質土器に共通する精良な胎土から土師質土器の範疇に含めた。八峰興氏の論考によると、東北・北陸・甲信・山陰に多く出土しており、山陽地域での出土は少ない。用途として「灯明皿又は蜜蠟立て」「儀式のための主たる器」「灯明・儀式などの補助具的器」を想定し、日常的な器よりも儀式的な器の要素が強いとしている。形態は12世紀末～13世紀前半に体部が皿状から杯（碗）状に変化し、その後衰退すると考えられている。県内では北広島町の鶴子原遺跡・須倉遺跡、尾道市御調町の曾川2号遺跡・家ノ城跡で出土しており、近年の尾道松江線建設に係る調査で備後の出土例が増えた。いずれも台底部は回転糸切りであるが、鶴子原例・須倉例・曾川2号例の体部は皿状で、前2例の一部には底部を穿孔したものがみられる。家ノ城例・杉谷例の体部は碗（杯）状で、前者は円盤状の台となり、後者も円盤状に近い。曾川2号例や家ノ城例の出土状況は儀式に使われたことを思わせる様相をみせているが、杉谷例の用途特定は難しい。時期は八峰氏の論考をふまえ、鎌倉時代前期とした。以上、杉谷遺跡の土師質土器の年代は、上述のように鎌倉時代前期～室町時代中期（12世紀末～16世紀初頭）と幅があるが、出土遺物に小振りな皿が多い状況や皿の形態から草戸II期後半（14世紀中葉）を中心としたものと考えられる。

須恵質土器は、東播系の特徴をもつ甕（1・19）が出土している。東播系須恵質土器は12世紀後半以降に西日本へ広く流通するが、備前窯製品の盛行によって14世紀以降に衰退したとされるもので、兵庫県の神出窯跡・魚住窯跡の出土遺物に類似した甕が確認できる。



第10図 土師質土器皿類・碗類の寸法分布

ただし、焼成不良で粗い調整は後出的で、神出窯須恵器編年D 1～E期（14世紀～15世紀後半）に比定される神出遺跡南区の出土遺物に形状・調整が類似した甕がみられ、この時期に並行するものと考えられる。高山1・2号遺跡でも東播系須恵質土器が出土し、青磁・白磁・瓦器などが伴っている。瓦器は椀・甕の破片で、内面に磨きを施した椀は和泉型瓦器椀と考えられる。町内では東上原で鎌倉～室町期の円形線香立、川尻の時森谷で片口土鍋が出土している。⁽¹⁸⁾

輸入磁器は青磁と白磁がある。草戸千軒遺跡における分類に対比してみると、白磁の椀は草戸W-1グループ、青磁の皿・椀は草戸D-1・R-1グループに分類され、年代的には草戸I～III期（13世紀中頃～15世紀中頃）に比定される。町内では、今高野山城跡や高山1・2号遺跡で白磁・青磁が出土している。⁽¹⁹⁾

2 柱穴群について

柱穴は全体的には散在的な分布を示し、明確な建物跡が想定できない。柱根痕がわかるP 1～5が等間隔ではないものの直線状に並んでいる。これらの土層はP 2のみ埋土3で、その他は埋土5となっているが、埋土5は埋土3に黄褐色の地山粒が多く混入したものであることから同時期のものとすれば、これらは一連の柵状のものであった可能性が考えられる。なお、P 4の柱根痕の埋土からは須恵質土器の甕片が多数出土しており、柱根を抜き取った後に土器を意図的に入れ込んでいることがわかる。建物を廃棄する際にこのような祭祀が行われる例もあり、類似した建造物廃棄の際の祭祀とも考えらえる。

柱穴の時期を特定できる遺物として、P 4から14世紀～15世紀後半に比定される東播系須恵質土器の甕が出土しており、P 4を含むP 1～5はこの時期に並行するものと考えられる。この他の柱穴は時期特定が難しいが、SK 1と同じ埋土のものがないことから古墳時代に遡るものはないといえる。出土遺物の構成や土師質土器及び輸入陶磁器の様相をふまえると、柱穴群の中心年代は14世紀中葉頃と考えておきたい。

周辺の中世遺跡に注目すると、杉谷遺跡から赤屋川をやや遡った地点に茶臼城跡、遺跡北方に宇根城跡、さらに北に少し離れた上谷には久代城跡・宮地城跡がある。茶臼城跡は城主や時期が不明であるが、宇根城跡は永禄10(1567)年に上原八幡神社に戸張を寄進した吉光氏の居城跡と推定されている。久代城跡は久代一族の本拠地で、応仁2(1468)年に「久代要害合戦」の舞台となつたと推定され、付近には室町中期～後期の古石塔や鎌倉後期に遡る石仏もみられる。久代城跡のやや南にある宮地城跡は和智氏の家臣又は世良氏の一族が居たといわれている。これら室町・戦国時代における大田莊の争乱をもの語る城跡と共に、当時の人々の生活を伝える遺跡もみられる。赤屋川上流にある楓山古墓は古墳を再利用した供養塔的なものとされ、宝篋印塔の形態から室町中期～末期の造営とされる。杉谷遺跡と同一丘陵の南斜面にある大柳遺跡では石積基壇や多量の瓦等が検出されたほか、石仏や五輪石も多数確認されており、瓦葺建造物を含む石造物群が明らかになっている。このように周囲には中世の城跡や石造物群などが多く存在しており、杉谷遺跡もこれらと密接に関わった人たちの遺跡と考えられる。

3 SK 1について

土坑は1基のみで、出土遺物から古墳時代と特定できる唯一の遺構である。土坑は不整梢円形の浅いもので、田畠造成時の削平を受けた結果と思われる。底面の中央～北東部にかけて須恵器の蓋杯6点と白玉2点が出土し、杯蓋1点以外は伏せた状態であった。構築時期は須恵器杯蓋・杯身の形態や白玉の共伴から6世紀前葉と考えられる。

県内でも、このように須恵器蓋杯がまとめて出土した事例が確認できる。三次市の緑岩古墳では周溝底面の窪みに蓋杯12組、安芸高田市の古保利第44号古墳では竪穴式石室の上縁部で蓋杯・塵など計12点が3×4列に並んだ状態で出土した。このほか、土器数に上下があるが、庄原市の和田原古墳群・曲第2号古墳⁽²⁷⁾や東広島市の金口古墳群⁽²⁸⁾、広島市安佐南区の寺山遺跡及び寺山第5号古墳⁽²⁹⁾、同市佐伯区の月見城古墳群⁽³⁰⁾などでも墳丘や周溝内に須恵器蓋杯を含む土器群が出土している。これらの古墳は全て竪穴系埋葬施設で、県内では5世紀後半から6世紀前半にかけて複数の須恵器や土師器を墳丘上（埋葬施設上）や周溝内などに密集して配置する祭祀が広範囲で普及した状況が窺える。

これらのうち、SK 1と同じ須恵器蓋杯6個体（を含む）が出土した例に、和田原第7号古墳・曲第2号古墳・寺山遺跡墳墓群C主体・寺山第5号古墳がある。畿内では奈良県の兵家古墳群や野山古墳群野山支群、後出古墳群などで須恵器蓋杯6個体を整然と並べる出土例が目立つことから、この時期において定形化した須恵器に伴う古墳祭祀とみる意見がある。⁽³¹⁾ 群馬県・静岡県・長野県・三重県などの中期古墳にも土師器高杯6個体を含む同様の事例が確認されており、この祭祀との関連が想定されている。⁽³²⁾ 曲2例では土師器高杯6個体が共伴しており、同市本村町の月貞寺第31号古墳周溝内でも土師器高杯6個体が出土している。これらには、土師器高杯の中に須恵器の杯身・杯蓋を嵌め込んだものや意図的に脚部を破碎した高杯など、共通的な侧面も見られる。しかし、県内では6個体に限らず様々な個数や組み合わせの土器群がみられ、これらが6個体に特化される祭祀か否かは検討の余地がある。

杉谷遺跡は、立地からみて近くに古墳が存在した可能性は低く、土坑以外の古墳時代遺構も明瞭でないが、包含層から土師器や須恵器の破片が出土している。周辺の遺跡をみると、南東の芦田川を挟んだ丘陵斜面には土師器が出土した時森遺跡や時森古墳群、赤屋川を遡ると茶臼山古墳や槇山古墳などがあり、古墳時代集落の存在が想定される。SK 1は、このような集落の外れに位置する祭祀遺構と考えられる。祭祀の内容は明らかにできないが、水辺に近いことや白玉が使われている点は岡の段C地点遺跡の祭祀遺構・SX 3に類似した様相である。須恵器を複数密集させた祭祀が古墳で行われていた時代に、古墳以外でも複数の須恵器を用いた祭祀が行われた事例として注目される。



▲曲第2号古墳出土の土師器高杯と須恵器蓋杯

4 結語

今回の調査では、中世を中心とした柱穴群と古墳時代前半期の祭祀土坑を検出した。包含層からは、縄文時代晩期の深鉢をはじめ、弥生土器・土師器・須恵質土器・土師質土器・瓦器・小谷焼など弥生時代～近世の土器が出土し、これらは長きにわたる生活の営みをもの語る資料である。遺物は土師質土器が多く、大田莊と共に歩んだ当地域の歴史的風土を感じさせる。付近には大柳遺跡をはじめ、中世の城跡や石造物が多く存在しており、杉谷遺跡はこれらと関わりながら中世を生きた人々の痕跡といえる。また、土坑は須恵器蓋杯6点と白玉を伴う祭祀遺構で、古墳に付随しない同種の遺構として良好な資料となった。

註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『高山1・2号遺跡』 1992年
- (2) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- (3) 広島県教育委員会『緑岩古墳』 1983年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金口古墳群』 1997年
- (5) 白玉の定義については、滑石製品の持つ祭祀的な共通性から「滑石製の小玉」全般とする見方もあるが、ここでは形状の観点から「白状を呈する滑石製の小玉及びそれに共存する核が退化したもの」とし、白型の形状が確認できない滑石製小玉と分けた。今回表から外した滑石製小玉が出土した古墳・遺跡（図示がなく確認できなかったものを含む）として、福山市の国成古墳、東広島市の大槻第2号古墳、三次市の三重1号遺跡・風呂谷遺跡・山手遺跡があげられ、近年の調査で古墳以外の出土例が増えつつある。なお、この表は梅本健治氏が作成した県内の玉類集成（参考文献2）を参考にした。
- (6) 甲山町『甲山町史』資料編Ⅰ 2003年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山2号遺跡』 1997年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『近森遺跡』 2008年
- (9) 註6と同じ。
- (10) 鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅱ 広島県教育委員会 1994年
鈴木康之「土師質土器の綱年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県教育委員会 1996年
- (11) 八咲興「柱状高台考」『中世土器研究集－中世土器研究会20周年記念論集－』中世土器研究会 2001年
- (12) 潟見浩「大朝町・千代田町の遺跡・遺物」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- (13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「須倉遺跡出土の土師質土器」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 1998年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮遺跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡』 2012年
- (16) 吉岡康暢「中世須恵器研究序説」『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994年
- (17) 妙見山遺跡調査会『神出1986 神出古窯址群に關連する遺跡群の調査』 1989年

- (18) 註 6 に同じ。
- (19) 註10に同じ。
- (20) 註 6 に同じ。
- (21) 註 6 に同じ。
- (22) 註 6 に同じ。
- (23) 註 6 に同じ。
- (24) 財団法人広島県教育事業団『椎山古墓』 2006年
- (25) 財団法人広島県教育事業団『年報9 平成23年度』 2012年
- (26) 古瀬清秀・川越哲志「古保利第44号古墳」『龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査報告書』龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- (27) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』 1999年
- (28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (16) 曲第2～5号古墳』 2011年
- (29) 註 4 に同じ。
- (30) 広島市文化財団『寺山遺跡発掘調査報告』 1997年
- (31) 註30に同じ。
- (32) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987年
月見城第2・8号古墳では、鐵鎌や鉄斧などの農工具が共伴している。
- (33) 楠元哲夫「六文銭」森浩一編『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』 1992年
同「六文銭以前」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』 1994年
楠元氏は、墳丘や周溝でまとまって出土する須恵器蓋杯6個体は死者の一膳分の食事を用意した墓前祭祀の痕跡であり、古墳時代中期後半から加わる須恵器の祭式とし、6個体という基本要素から「六文銭」と呼んでいる。蓋杯は仰向けで内容物の存否を露わにした状態、高杯は脚部を破損した状態で出土することが多く、これらを「死者復活拒否の宣言」を意図する行為とし、他種の須恵器を含めながら構成がパラエティ化する傾向を指摘している。
- (34) 三重県の石薬師東古墳群では須恵器蓋杯6が出土した古墳と土師器高杯6が出土した古墳が併存している。静岡県の森町円山丘陵の古墳群では須恵器蓋杯6・土師器高杯6が出土した古墳と土師器高杯6が出土した古墳が併存しており、古墳の先後関係から六文銭祭式が土師器に派生した変遷状況が見て取れ、土師器5・須恵器1の高杯6個体が出土した同県・明ヶ島6号墳例は過渡的様相といえる。このほか、群馬県の下高瀬上ノ原5号古墳や神奈川県の上地東3号墳、長野県の横口の塚古墳などの周溝や墳丘で土師器高杯6が確認できる。これらは、以下の報告書を参照とした。
- ・三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡』 2000年
 - ・財団法人静岡県埋蔵文化財研究所『森町円山丘陵の古墳群 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 森町一3』 2008年
 - ・磐田市教育委員会『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2003年
 - ・群馬県埋蔵文化財調査事業団『下高瀬上之原遺跡』 1994年
 - ・比々多第一地区遺跡調査団『比々多遺跡群』 1987年
 - ・長野県飯田市教育委員会『横口の塚古墳』 2001年
- (35) 広島県教育委員会『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- (36) 三次市和知町の河原田2号遺跡S D901(古墳の周溝)では高杯9個体がまとめて出土しており、脚部を意図的に破砕していた。

参考文献

- 1 吉舎町教育委員会『三玉大塚』 1983 年
- 2 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10） 権現第1～3号古墳』 2010 年
- 3 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33） 箱山第3～6号古墳』 2014 年
- 4 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『御堂西古墳群発掘調査報告』 1984 年
- 5 広島県教育委員会「吹越古墳群」「石鎚山古墳群」 1981 年
- 6 広島県教育委員会「板迫山古墳群」『中国縦断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3） 1982 年
- 7 広島県教育委員会「恵下B地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1977 年
- 8 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985 年
- 9 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』 1983 年
- 10 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』IV 本文編 1994 年
- 11 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三太刀遺跡』（1） 2003 年
- 12 石倉良治「房總の石製模造品」『研究紀要』第8号 千葉県文化財センター 1984 年
- 13 横田健次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』4 九州歴史資料館 1972 年



◀柱穴の掘り下げ作業風景

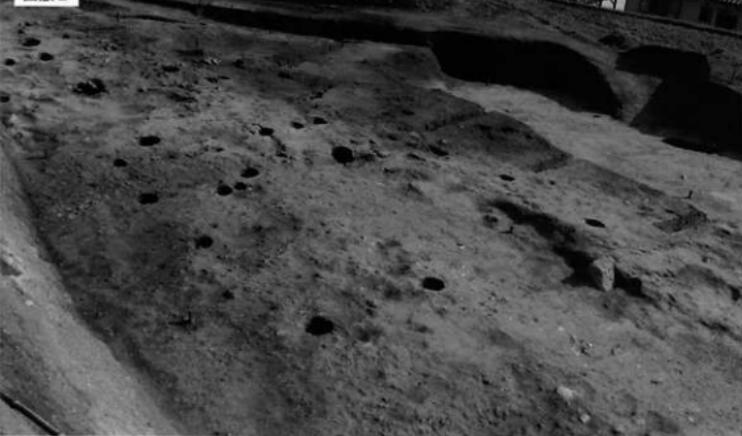


調査風景▶

図 版







a 柱穴群完掘状況
(北から)



b P 4 遺物出土状況
(南西から)



c P 4 土層断面
(西から)

a SK 1 遺物出土状況
(東から)

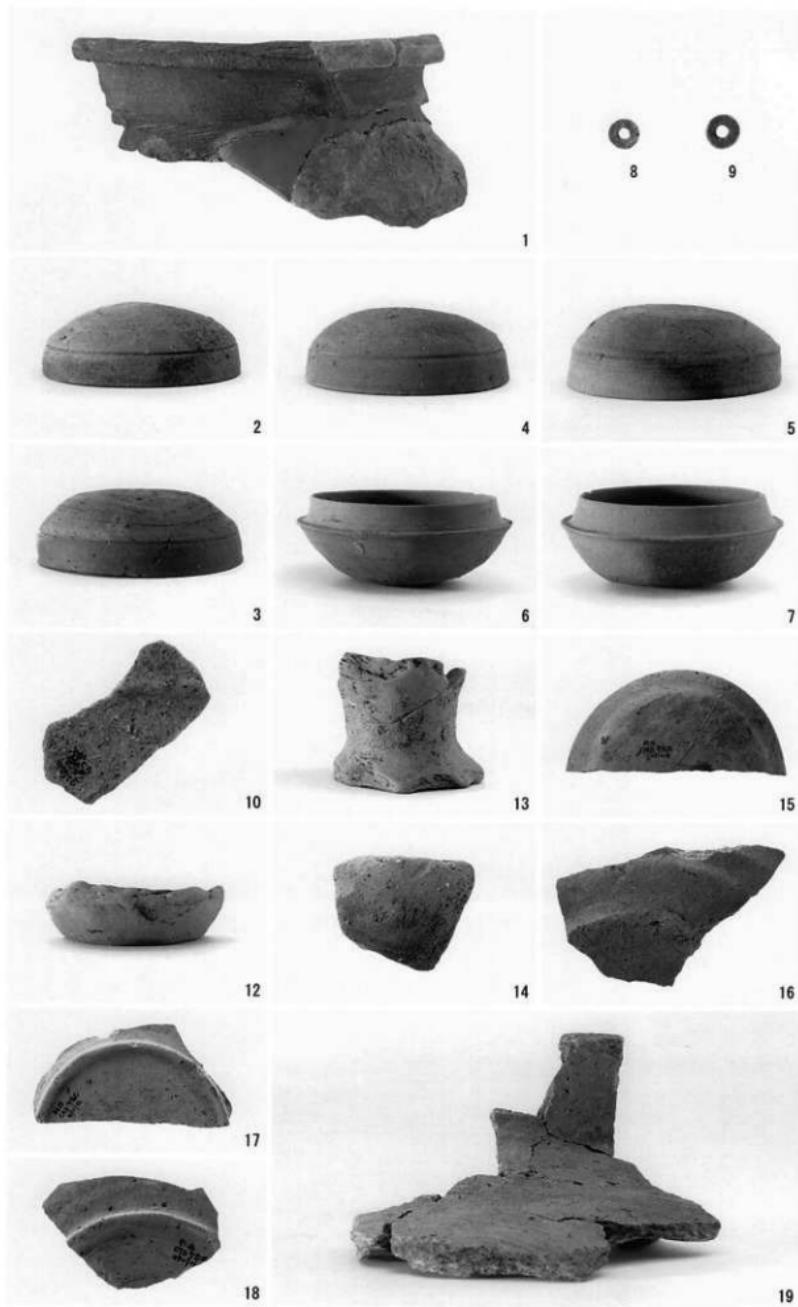


b 同上
(西から)



c 同上
(南から)







24



28



31



25



29



32



26



30



33



27



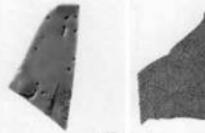
34



35



39



36



37



38



40



41



42



43

報 告 書 抄 錄

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第66集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告（38）

杉谷遺跡

発行日 平成26（2014）年3月24日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区城音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951

発行 公益財団法人 広島県教育事業団

印刷所 株式会社エル・コ